

船井情報科学振興財団 学位取得レポート

2019年12月

澤田 真行

長いようであっという間の6年間でした。財団のみなさんのおかげもあり、今年の五月に無事Yale大学にてEconomics Ph.D.を取得しました。澤田です。

本来ならば、取得直後のできるだけ早い時期にご報告すべきところ、引っ越し、就職、新生活とバタバタしているうちにもう年末です。こんな不義理ばかりの奨学生にも関わらず、益田先生にも先日は温かいお言葉をいただき、感謝の念に絶えません。

私は今年の七月より、一橋大学経済研究所のテニユアトラック講師として勤務しております。日本での就職ということを活かして、今後こそ財団に恩返しできたらと思っております。今年度は修士学生向けの計量経済学トピックコースを担当しており、年明けの講義を残してはいるもののやっと落ち着いてきたところでございます。



図1 学位授与式後集合写真：後列中央から右隣が著者。この帽子、かなり不評でした。

■就職活動について 就職活動の思い出を一言で語るならば、「思っていたよりもずっと楽しい、が、二度とやりたくはない」です。これは先輩に就活の話を知ると大概返ってくる返事で、自身で経験するまではそんなわけあるかと思っていました。しかしながら、実際にアトランタでインタビューを受けてみると、どなたも揃って紳士的で、私の研究内容と方向性に真剣に向き合ってくれているのがよく伝わってきました。(これはある意味当然のことで、採用担当者側も自分たちが後々「選ばれる側」になることをしっかりと意識しているのですね。)

前回の報告書でもお伝えしましたが、経済学の(北米を中心とした)就職活動はアメリカ経済学会での一斉インタビューから始まります。今回はアトランタで行われ

ました。私は民間企業三件、大学九件の合計十二件という、決して多くはないものの、一通りスケジュールが埋まる程度の招待をいただきました。それとは別に、インタビュー後に日本の大学三件からフライアウトの招待をいただいておりますので、どうかどこかには就職して生き残れるかな、などと考えていました。インタビューもほとんどは順調に終え、多少なりの達成感を開放感を抱きながらひとまずニューヘイブンに帰ってきたのでした。

ところがそんな甘い考えを持っていた私を、じわじわと不安が襲ってきました。就活準備は仲の良い同期四人ほどで集まってやっていたのですが、彼らに次から次へとフライアウトの連絡がきているのにも関わらず、私には何も来なかったのです。全く違う分野の、違う類の出願先の友人でしたから、振り返れば焦っても意味のないことだったのですが、一気に冷たい現実に戻される気持ちになり、これは日本のフライアウトを何が何でも掴まねばという気持ちになりました。実のところこれらは杞憂にすぎなくて、後から北米の大学からもフライアウトの招待をいただいたのですが、あの何もない待ち時間に味わった背筋が凍る感は今でも忘れません。(こういった事情からジョブマーケットの間に交友関係を絶って閉じこもってしまう学生が一部見受けられましたが、ジョブマーケットは情報戦であり、決してお勧めできません。一方で、近い分野の学生の情報が精神衛生上よくないのは事実で、似たような状況だけでも採用機会としてはかち合わないような少し離れた分野の友人と面接練習などを重ねることをお勧めします。)

正直なところ、私はマーケットにおいて一番に評価されるような候補者ではありませんでした。そのため、トップ校との縁はありませんでしたが、比較的幅広いランキングの大学の面接・訪問を経験することとなりました。痛感したのは、北米の経済学研究者の層の厚さです。フライアウトで訪問したい大学のうちにもとても面白い研究をして、私の発表に対してクリティカルなコメントをくれる研究者が必ずいて(私を呼んでくれるからには当然ではあるのですが)、ただその時のマーケットの需要に対して分野や研究内容のマッチングがうまくいかなかったという類の研究者がこんなにもいるのかと驚いたものです。

唯一の心残りは、現職からのオファーに対して早めにコミットメントをしなくてはならずお声かけいただいた全ての大学には伺えなかったことですが、将来的にはぜひセミナー報告などで訪問できたらいいな、と考えています。

■今後の研究の進展 ひとまず新しい環境に落ち着き、就職活動から解放されたことで、今までよりも広い関心を持って新しいプロジェクトに手を出しています。この状態をある先生は「ドラゴンクエストで船が手に入った段階」と形容していらっしゃるいましたが、まさにその通りでなんでもできる！と楽しく過ごしてしたらあっという間に過ぎ去ってしまった半年でした。この半年で新たに進められた研究の進捗は確かに出ているのですが、ここからはキッチリ終わらせる、ということを強く意識して進めて行かないとテニユアトラックの期間があっという間に終わってしまう

と痛感しているところです。

博士論文は前回お伝えした通り、プログラム評価の手法開発です。最新バージョンではアプリケーションをモロッコを舞台とした実験 (Crépon, Devoto, Duflo and Parienté, 2015) としまして、ランダム化の前に観察された変数を用いることで、前回のバージョンよりもより弱い仮定でマイクロクレジット参加の効果を推定しました。通常、プログラム参加が内生的に決定される時はプログラムへの無作為割り当てを操作変数 (例: Angrist, Imbens, and Rubin, 1996) として使うのですが、プログラムへの割り当て自体が直接の効果を持つときはその割り当てを操作変数として使えない問題がありました。その結果、操作変数による推定値が私の推定に対して 2.3 倍にも大きくなるということがわかり、プログラムへの割り当てに正の効果がある可能性が示されました。最新バージョンは私のホームページ:<https://sites.google.com/view/masayukisawada/research> にてご覧ください。こちらはしばらく前に投稿しまして、いまだに音沙汰がない (よくあることですが) のでやきもきしています。

伊神教授との論文に関してもアップデートがなされまして、現在査読待ちの段階にあります。2000 年代の中国企業のデータに着目し、私企業は国営企業に比べて生産的だと言われるがそれは本当なのか、この時期に多く行われた国営企業の民営化は生産性を高めたのか、という問いに答える論文となっています。こちらも最新バージョンが https://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract_id=2695933 に公開されています。

その他走っている研究はまだまだあるのですが、いずれも公開段階に至っておりません。公開できるようになりましたらその都度上記のホームページで公開してまいりますので、是非ともご覧ください。

■参考文献 Angrist, J. D., G. W. Imbens, and D. B. Rubin (1996): “Identification of causal effects using instrumental variables.” *Journal of the American Statistical Association*, 91, 444-455.

Crépon, B., F. Devoto, E. Duflo, and W. Parienté (2015): “Estimating the impact of Microcredit on those who take it up: Evidence from a randomized experiment in Morocco.” *American Economic Journal: Applied Economics*, 7, 123-150.



図2 よくある帽子投げをやってみた図：結果どれが誰のかわからなくなりました。

■終わりに なかなか予定が折り合わず、お世話になっているみなさまへのご挨拶を怠っておりまして大変心苦しく思っております。なんとか就職活動を乗り切りましたので、今後こそなんらかの形で恩返しができたらいいなと考えています。久しぶりに日本での冬への移り変りを体感しておりますが、だいぶ寒さが本格化してまいりましたね。みなさまどうぞお体にお気をつけてお過ごしください。本年の年末交流会には伺いますので、奨学生ならびに財団の皆様にご久しぶりにお目にかかるのを楽しみにしています。

澤田 真行